『学　校』一九五八年二月（新日本教育協会）

巻頭言

自覚と反省

矢口　新

教育評価という言葉が普及しだしたのはごく最近のことである。しかし本当にそういう活動が教育の中でおこなわれるにはまだ相当の時間を必要とするであろう。これは全く教育の世界では新しいことなのである。

日本人ほど猫も杓子も大学に行きたがる国民はない。教育熱心だといわれるゆえんだが、その肝心の教育の結果、どういう人間が育っているのかということには全然関心がない。ただ成績が良いとか悪いとかいう原始的な言い方で満足している。教師とても同様である。自分のやったことが現実に人間をどう育てたことなのかを考えようとしない。自分のやっていることに欠陥がないかどうかを具体的に考えようとしない。ただ習慣と惰性に従って教育しているというのが大半である。自覚がないのである。

自覚が人間の進歩を促すもとであるといわれる。教育評価とは、教育の具体的な自覚である。